

台北旅行

倉 田 稔

2015年1月、台湾旅行をした。といっても首都の台北だけである。

台湾は、歴史では初め、大航海時代にオランダ、スペインがやってきた。その後、鄭成功(註)が平戸から初めて台湾へ来た。それまで南方系の原住民だけだった。その後、清朝の支配に入った。

日本との関係で言うと、1895年の下関(馬韓)条約が重要である。日清戦争で日本が勝利し、中国は、台湾、遼東半島、澎湖諸島などを、日本に割譲した。1945年に日本軍国主義が敗北して、台湾は中国のものになった。蒋介石の政府と軍の一部が、日本の武装解除のため、台湾にやってきた。

1947年2月28日、本島人と中国人との間で対立事件が起こった。二二八事件という台湾では有名な弾圧事件である。

1949年に中国革命が成立し、負けた蒋介石が国民党政府を連れて逃げてきた。中国人も従ってきた。そこでまた現住民と軋轢が生じた。1945年以前に住んでいる人が本省人で、それ以後の人は外省人という。本省人にも先住民と漢人がいる。先住民は主に9族が有名で、それ以外に多くの種族もいる。

現在(2015年)、台湾は人口2300万人である。島は日本の九州と四国間の大きさである。首都台北は名古屋くらいの規模で、自動車では現地生産を含めた日本車が多く、6割くらいである。2014年に、トヨタ29・7%、日産11・3%、三菱自動車11・2%などである。その他、現地資本と日本メーカーの合併で、自動車生産がされている。スクーター等のバイクも多い。自転車は多くない。ジャイアントという有名な自転車メーカーがあり、主に輸出している。畳屋が沢山残されている。

台湾ではIT関係の製品が多量に生産されている。今、台湾は世界第3位の外貨獲得額を持つ。GDP内で農業比率は2%。電子工業が盛んで、半導体や、多くのコンピューター部品の生産をする。

政治の最高指導者は総統といい、1988-2000年は、李登輝(国民党)、2000-2008年は陳水扁(民進党)、2008-2016年は、馬英九(国民党)だった。2016年に、蔡英文女史(民進党)が総統に選ばれ、立法院でも民進党が過半数を得た。民進党は独立志向で、李登輝も独立志向で、馬英九は中国寄りであった。

気温は今1月で、日平均15度なので、ちょうどよい。夏は34度くらいになり、また湿気は多いそうだが、時々スコールが降るので少し涼しくなる。

通貨は1元(新台幣ドル)が今、大体4円である。紙幣には圓と書いてある。「マネー・チェンジは、ホテルは割高だから銀行の方がよい」とガイドさんが言う。本稿では、元と表示したい。従来、アメリカと日本との関係が深かったが、最近は中国との関係が強まった。100万人余が中国に滞在している。輸出先は、中国(+香港)が37%、アメリカ16%、日本

8%、輸入先は、日本26%、アメリカ13%、中国（+香港）11%である。地下鉄や新幹線は日本の技術である。物価は日本より少し安い。

2011年の日本の東日本大地震では台湾の義援金が外国からでは最高だった。戦争が終わってもそのまま住んでいる日本人が多いという。日本の台湾統治は他の植民地に較べれば良かったらしい。

（註）鄭成功（1626-1662）、オランダ軍を打ち払った、台湾での英雄である。日本生まれで、日本と中国人の混血である。

台北（タイペイ）市内は碁盤の目のようになっている。市の西側を淡水河が流れる。ガイドは「と」という人なので、以下、トさんとする。

1 一日目、忠烈祠を見に行った。 ここは国家に功績のあった人々を祭る場所で、日本のように軍人だけ祭る靖国神社のようではない。正面の門に儀仗兵が二人いて、1時間ごとに交代する。その際、十数人の兵士がやってきて、儀礼の行進をして、銃剣をあやつる技を見せながら、交代する。儀仗兵は、まばたきもあまりしないほど動かないで立っている。汗をかいても、係員が彼の汗を拭くのである。征服の色で軍隊の違いが分かる。カーキ色は陸軍で、白が海軍、青は空軍で、エリート兵士がローテーションで衛兵となり、衛兵交代をする。この建物は色彩が豊かで、赤、緑、黄色であり、黄色は皇家を示し、数は九が最高で、龍の爪5つが皇家を示す。

この近くで圓山大飯店が見えた。私は龍山ホテルとも聞いた。グランドホテル台北とも言うらしい。大きな素晴らしいホテルで、会議場にもなるそうである。丘の上に建ち、警護に都合がよいから、外国の賓客が泊まる。一般人も泊まれるが、値段が高いそうである。赤い色の建築物である。

2 次に、国立故宮博物館へ行く。 歴史をパネルにした部屋がある。初めガイドのトさんから中国史の簡単なレクチャーをここで受けた。この博物館では中国歴代皇帝家の宝物が展示されている。玉（石）の文化だと感じる。翡翠の工芸品が多い。磁器も素晴らしい。ここには、かつて北京の故宮にあった物を、共産党の革命を逃れて、重要な美術品を木箱に入れて船で持ってきた。だから北京の故宮は重要な物が少なくなった。多分半分はニセモノだろうという。翠玉白菜が有名で、白菜にイナゴとキリギリスがついている翡翠の彫刻である。実に細工が細かい。次いで肉形石で、豚の角煮にそっくりな石である。多くの展示品のデザインに龍が使われている場合が多いが、龍の爪は五本で、前述のように、皇帝家の象徴である。ハイライトだけで二時間で見て回った。凡てを見るのに二時間では無理だが、くたびれてしまうので、ちょうどよい。台湾の多くの学校の生徒が見に来ていた。修学旅行であろう。大英博物館、ルーブル博物館、エルミタージュ博物館と並んで、ここは世界の四大博物館の1つと言われているが、10番目くらいではないかと思う。

3 次に、中正記念堂を見る。 中正は蒋介石の別名であり、彼の記念堂である。とても大きいもので、蔣の息子・蔣経国が造った。正面に階段があり、彼が生きた年齢の数の段である。最上階に蒋介石の巨大な座像があり、儀仗兵が守っている。ここでも交代する。彼

の大統領執務室が再現されている。たぶん蠟であろう、実物大の人形がある。展示室には、重さ3トンの乗用車があり、防弾・防地雷で、窓は鏡となって中が見えないようになっている。他にもう一台、新しい車がある。台湾人はここを見せたいのだろうと思うが、こんなに大きな物を作る必要は無いように思える。

4 近隣の建物を見せて貰った。 隣に自由の広場がある。劇場なども近くにある。市内を車で動いている間に、日本植民地時代の建物が多く見える。台湾では、日本の造った建物はなるべく残そうとしている。韓国では壊したが、台北での例としては、台湾総督府、法務省、台湾女子学校、男子高等学校が残っている。日本人は塔の屋根を富士山型にした。つまり円錐状にした。

5 道教の寺院。 龍山寺と行天宮を参詣した。龍山寺は儒教と道教の寺である。1738年に創設された台湾最古の寺である。道教は中国の宗教だと、ガイドは言う、儒教は宗教ではないと。ここで、長くて太い線香をもって人々が祈っている。木片を投げて占う。蜜柑の粒のような形を大きくしたものであって、その結果をかなり信じているらしい。

次の行天宮にゆくが、その寺の前に、地下に占い横町がある。狭い二本の地下道である。どれも皆、沢山の小さな店の前に、木のベンチが長く並んでおいてある。待つお客のためである。大勢が来るのだと推測出来る。「日本語でも占います」と書いてあった。人生を全部占って貰うと1000元(4千円)だ。随分高い。ただし一つの案件だと、300元らしい。占い師は女性が多い。この日はほとんどお客がいなかったが、時間のせいだろう。行天宮(註)は、関羽を神として祭った寺院で、主に商売繁盛を願う。お線香はなく、僧はいない。係の人はみなボランティアだそうだ。縁結び、健康、富、の神様がある。人々は喜捨をし、お祓いヘラ棒で、祈って貰う。この寺院は二度移転した。

道教の寺院の屋根には龍や神様の像が沢山飾ってあって、賑々しい。ちなみにこの龍の爪は四本である。皇帝家ではないからである。中国文化圏では、皇帝家だけが五本の爪の龍を許される。

道教は、ご利益宗教で、迷信の集合体である。仙人が不老長寿の薬を持っていて、庶民も是非あやかりたいというものである。化物や妖怪が出てくるのは道教だ。「西遊記」でよく分かる。風水はこれである。中国人はこの迷信を信じている。

(註) 行天宮は、2015年1月、札幌雪祭りで、その雪像が作られた。

6 お茶。 中国ではお茶が名物なので、お茶の店に入った。だがそこは古式ゆかしい所ではなかった。熱い湯を、茶葉が入った急須に注いで、小さな茶碗で数杯お茶を飲むという簡単なものであった。入れてくれた女性が、もう二度も日本に行ったとのことで、小樽にも来たという。店にはお菓子やお茶の土産物が売られている。

7 足もみ。 台湾ではマッサージが有名だそうで、「その気があれば、やってみますか」と言われたので、その気はないが、体験のために受けることにした。足のマッサージだけで、一人700円で、30分である。高い。入ったその店は発祥の店だという。台北には多数のマッサージ店があり、たいへん繁盛しているようだ。ここではアパートの数階にわたって部屋があり、

依頼人が一杯で、韓国旅行客が多く、女性が多かった。団体観光ツアーの一環に組み入れられていると思える。やり方はこうである。たらいの中に洗剤をお湯に入れて、それで足をちょっと洗い、マッサージが始まる。施療人は上手である。そのための大学があるというが、専門学校ではないだろうか。男性には男性が、女性には女性が接する機会が多いようだ。足をもみながら、身体に不調があるかどうか色々症状を聞くのだが、身体の調子が悪くないとか、病気はないという人はいないだろう。その聞いた話に基づいて、係の女性がそれに合った薬を選んで、「是非お買いなさい」と言ってくる。かなり押しつけがましい。推薦するのは、最近発見された大変よく効くキノコらしい。二万円もするので、私はやめた。ガイドも、「よく診察してからにした方がよいですよ」と言う。ガイドは「私も時々足もみをしてもらいに来ます」と言うが、台湾の人は値段が高いので、行かないようだ。ワイフは足裏にとってもよく効くというバンドを買っていた。私は騙しだと思いが。

8 食事。 小籠包（しょうろんぼう）について。「鼎泰豊」（ディンタイフォン）という店で小籠包などをセットで食べることになった。繁華街の中にある。ある店の前で大勢が待っているの、「ここでは食事をしたくないな、待ちたくない」と思っていたら、何とその店で食事をするのであった。待ち時間が37分ですと電光掲示板にあった。しかしガイドが予約をしてあるとのことで、10分ほど待って店に入れた。間口は狭い。受付があつて、右手には大勢の料理人が働いている。1階にはほとんど席はなく、2階には数室部屋があつて、そこで食事をする。聞いてみると大変有名な小籠包の店であり、台湾だけでなく、世界中に支店がある。日本にもある。ここは本店なのであった。ここで作った小籠包を台北の支店に配るので、大勢の料理人がいるのだ。せいろに入った小籠包が出てきて、食べ方を教わり、その後、蒸し餃子、スープ、チャーハン、野菜、デザートなどで終わった。チャーハンは大体美味しい。大勢の人が待っていると思うので、ゆっくりしてもいられないと思つたが、隣のアメリカ人は無神経にもゆっくりしている。

ここは世界で最も有名な小籠包の店ということになる。包んである皮が壊れないようにしてハシでつまんで、タレをつけ、食べると、この蒸し餃子の中からスープがしみ出てきて、たしかにおいしい。台湾では人々はここの小籠包は高いので食べないらしい。このディンタイフォンでは一ヶ19元で、安い所では一ヶ5元というものもあるそうだ。こうなると四倍だ。我々のホテルのレストランでも小籠包を注文したが、これもおいしかった。鼎泰豊はもう観光客向けになっている。

一日目に、ガイドの案内で市内の中華料理店でランチをした。豚の角煮が出て、脂身が多い、しかしよく煮込んでいるので、食べられる。豚の皮もついている。残していたら、ウェイトレスに、「これはおいしいよ」と言われたので、食べてみると、なかなか美味しい。だが慣れない。

焼きそばは、ホテルでは麺が極細であった。ゆでて軽く炒めてニンニクで味付けしたキャベツはおいしい。我々のホテルの最上階がレストランで、多分ホテルだからおいしいだろうと思って、ここで二回食事をした。はじめ、入ってみると、すぐ「小籠包？」と聞きに来るので、日本人はいつも小籠包を注文するのではないだろうか。日本語も書いてあるメニューを見るが、分かりにくい。せいろを沢山車にのせて、売り歩いている。台車に乗せて、ガスボンベ・コンロで暖めている。だからいつも暖かい餃子が食べられる。食べ放題という

コースもあった。各種の蒸し餃子を注文した。チャーハンはちょっと独特のにおいがする。ベーコンの匂いだった。

ビールはコンビニで買って各種試した。パイナップル・ビール、台湾ビールは、味がまだまだである。青島ビールは有名なもので本来おいしいものだが、台北ではカンのせいか、まだまだである。

ロイヤル・ホスト、マックドナルド、その他ファストフード店はどこにでもある。ただし、メニューは台湾人向けに変化しているのではないかと思う。ガイドに土産物店と免税店に案内されたが、ほとんど何も買わなかった。パイナップル・ケーキが有名なもので、お土産に少し買っただけだった。それでもパイナップルが沢山入っているわけではない。

9 夜市。 一日目、台北で一番大きな夜市を案内するといわれ、行ってみた。士林夜市といい、地下鉄・剣潭駅の近くにある。地上に、朝市もあり、その両側に夜市がある。夜だったから朝市は閉まっている。そこは日用品から雑貨、食料、何でもある。射的や金魚釣りもあって、ほほえましい。ここには地下街があり、そこでは多数の食堂が店を並べていた。厨房がなく、食材がそこら辺に乱雑に置かれ、それを調理する。独特の強い臭いを放っている。肉や魚、揚げ物、煮物、これらが大勢の人が注文して食べている。我々は注文できそうにない。ガイドも、「ここで食べない方がよいですよ。地元の人には食べてももちろん平気だけど、日本人はお腹をこわすかもしれない」、と言う。後日、日本のテレビが入ってここを映していた。若いレポーターは、「おいしい」と言っていた。旅行本では、ここがB級グルメだとして推薦していたが、どうだろうか。

この近くに「牛排」を食べさせる店があった。ガイドのトさんは、「牛排って何だと思えますか」と、クイズを出す。色々答えたが、全く当たらなかった。「ビーフ・ステーキですよ」と教えてくれた。帰り際、路上で脚のない乞食が道路に額を打ち付けながら物乞いをしていた。哀れである。

翌日、二番目の夜市に、若い女性のバス・ガイドに連れて行って貰った。そこは、ぎょう(食へんに堯)河街観光夜市といい、松山慈祐宮のそばである。その寺院は海の神様を祭っている。このお寺は財団法人であった。これも道教であるらしい。この夜市は、一日目に見た士林夜市よりもすこし品が良い。夜市では衣料品はそれほど安くなかった。帰りの出口で片腕のない乞食がいた。

夜市は、台北中に沢山ある。日本のお祭りの屋台の並びのようであり、いわば、毎日お祭りがあるような具合である。我々のホテルの周りにも小さな夜市や食堂街があり、見て歩くのは楽しい。夜、散歩していたら、路端で屋根なし屋台が、総菜を売っていた。すでに味の付いた種々の野菜や肉である。若い女性が、好きな物を注文して。ビニール袋に一杯入れて貰って、100元払った。四人分くらいのおかずであった。台湾人は家であまり食事を作らないそうで、だからこういう店は流行るのだろう。

10 ホテルで。 我々のホテルは、レオフー・ホテル(六福客棧)といい、一時代前に一番よいホテルだったとか言う。だからちょっと古い。日本から修学旅行生が団体でやって来た。丹後からだという、二泊くらいですぐ他所に行った。多分他の都市や田舎を見に行ったのではないか。普通、我々みたいに台北市内だけで観光をやめるといのは、ほとんど

ないだろう。ホテルにコンビニがある。近くに銀行が沢山ある。裏に夜店街がある。ホテルの朝食はビュフェ方式で、口に合わなさそうな物もある。粥があるので胃にはとてもよい。スター・フルーツは初めて食べた。このホテルでは従業員を月10万円(1元を4円として)の給料で募集のため、張り紙をしていた。

11 生活。 台北では乗り物には列を作って並ぶ。これは中国本土では考えられない。煙草は建物内禁煙の法律ができた。ホテルやレストランの前の路上には灰皿用のボックスがおいてある。煙草の値段は日本と同じくらいである。

ビンロウがあり、これは強い興奮剤だ。七本くらいの緑色の蛍光灯を半円形に並べて店のしるしにしている。夜はこれが光っているのでよく分かる。沢山あるので、台北の人はこれをよく摂るのではないかと思える。

台北では人々は、マンションやアパートに住む。あまり1軒家はない。時々素晴らしいマンションもある。70才代では80%の人が親日だという。

公衆トイレは、特に見当たらないが、地下鉄の駅にあるから大丈夫だろう。

大学を出たばかりの人の月給は、飲食業で、2014年で約9.5万円(1元3.5円として)だそうで、残業代や交通費は出ない。だが地下鉄は安い。交通費が出ないのは中国本土と同じである。残業代の支払いは、もちろん労働基準法で規定されているが、支払われならしい。実際の労働時間は日本より長いはずである。労働基準法では日本より週一時間長い。

物価は安いかもしれないが、給料が安い。だから台湾では生活は日本よりも苦しいだろう。今述べたホテルでの月給10万円というのは高い部類である。例えば、ネットでは、こうある。タクシー初乗り 70元、カンビール 29~35元、喫茶店のコーヒー 40~130元、である。台北の人は外食が多いようであり、これも生活にとっては大変だ。台北は大都会だから物価は高く、地方では物価は安い。

物価について言えば、我々は観光客なので、観光客向けの店に入りがちであり、そこは安くない。だが、地元の人が入る所は安い。賃金の全体的統計はないそうだが、大胆な推測をすると、日本と比べて台湾は物価が半分、賃金が半分ではなからうか。

我々のホテルは長春路という名の通りに面していた。九份行きバス・ツアーに参加するため、集合場所へ向かい、その道を10分歩いた。途中で小学校があった。とても大きな建物である、他の小学校も大きなものであった。

12 ガイドさん。 我々を一日ガイドしたトさんは、かつて外務省の役人だった。定年でガイドになり、国家資格を取った、日本人相手のガイドだけするのだ。息子が上智大学に留学し、娘はバンクーバーにいる。このトさんは、日本でも生活した。小樽にも行ったという。とても日本語がうまい。

「毛沢東と蒋介石の戦いで、もし毛が負けたら違った歴史になったでしょうね」と言ったら、「ソ連が日本軍部の武器を奪って毛に与えたので、毛が勝った」と彼は力説した。「中国本土は社会主義で、台湾は資本主義なので、台湾人は中国本土に対して何か異見がありますか」と聞いたら、それにははっきり答えなかった。その代わりに、「台湾は資本主義でなく民主主義ですよ、何でも自由に言えます」とのことだった。

なおもう一人の最後の初老女性ガイドは、空港への送りの仕事だけだった。そして、子

供をヨーロッパに留学させている、医者になるのだ、と。50分ほどの短い時間で、しきりに言っていた。台北の人は自慢が好きなのだろうか。アメリカ人みたいである。また彼女はワイフが気に入ったと言って、海竹（註）という赤いネックレスをプレゼントしてくれたのであった。この人は日本語が上手ではない。

狭い島にいるので台湾人は国際的になるのかと思う。少なくとも、よく外国に行くのではないか。台湾にいるだけなら、飽きてしまうだろう。

（註）トクサヤギ。比較的浅い海に生息する造礁珊瑚の一種。元々は象牙色で、赤やピンクに染める。

13 スウィーツ。 二日目。台北で果物とアイスのミックスしたスイーツが有名のようなので、食べに行くことにした。旅行本に載っている所へ行くことにしたら、地下鉄で2駅乗るのだった。芒果皇帝という店を見つけた。小さな店なので見過ごしてしまい、また戻ってきた。日本人旅行者が数人来た。私たちが店にいる間は、客は日本人ばかりだった。マンゴーやキウイやイチゴなど使い、皿に載せ、砕いたミルク氷とアイスクリームがついている大きな皿であった。一人では食べきれないのではないかと思える。

その後、近くを散歩した。我々のホテルの付近とも違う場所であり、マンションとかアパートも近くに種々あって興味深い。

台北では西洋風ケーキもおいしそうにウィンドウに並んでいたが、買わなかったので、味はわからない。台湾はパイナップル・ケーキがよく売られていて、名物である。甘く煮たパイナップルをほんの少し入れて、カステラ風のもので包んである。とてもおいしいというものではなかった。まんじゅう菓子も同様であった。パンは専門パン店のものはおいしいようだ。台湾バナナは美味しいだろうと推測して、一本買ってみたら、日本と同じ程度であった。しかしおいしい物もあるらしい。お餅の饅頭を買ってみたら、味が薄くてそれほど美味しくはなかった。もっとも好き好きではあるが。

14 地下鉄。 地下鉄の乗り方をトさんに教わったので、乗ってみた。一番安い距離が20元（80円くらい）なので、ありがたい。機械で電子チップを買って構内に入る。出る時それを改札で返却するのである。コンピューターが読み取ってくれる。これで、紙も何も使わないから合理的である。幾つかの路線があり、最終駅を確認して乗る。これはパリに似ている。日本での優先席が、ここでは博愛席と言っている。おそらく日本よりも、老人らに席を譲る態度が良いと思う。座席はほとんどプラスチック製である。10回くらい乗るのに、割安の回数券もあるという。「地下鉄は日本製ですよ」とトさんは、嬉しそうに言う。

15 九份。 二日目に、九份（ジイフン、日本人は キュウフンという）へ行った。台北市から列車やバスで一時間の、田舎の町であり、昔、金が出たので栄えた。日本が作った町だそう。今は観光地である。観光バスに乗って参加したが、その会社はバスを10台連ねた。だから350人くらいだろう。多くは日本人女性であった。

山にそって上へ町が伸びている。そのため、まず200段ほど階段を上がる。これにはくたびれた。さすがに個々には手すりがある。登り切ると、そこには狭い広場がある。そこからまた100段ほど階段を上ると、細い道が右左に横切って通っている。そこからまた100

段ほど階段がある。上の階段の途中に、芋団子屋がある。小さくカットされた芋の団子に甘い汁がかかっている、暖かいものと冷たいものを選べる。分量はかなりある。これをガイドに推薦されていたので、1つ買って食べ、店内の席から外の景色を見た。そこでは関西からここへ二度来たという婦人がいた。

上段と中段の階段の間の道にそって、草餅の家があるはずであった、しかしバスガイドが教えてくれたところにはなかった。その付近の店の親切な娘が連れて行ってくれた。餡の入った草餅はおいしかったが、そぼろ肉の入ったものは、どうもいただけなかった。後でガイドに、「そこには草餅屋がなかった」と言う、「そんなことはない絶対ある」と、引き下がらないので、中国人らしいと感心した。彼女はなかなか可愛いらしい、若い、感じがよい人で、仕事熱心ではある。

かの小さな広場から先へ行くと、景色がよく見える場所がある。皆写真を撮る。野良犬が一匹うろついていた。また昔の民家を利用してお茶をだす店もあり、そこを見学できる。広場前の店で軽夕食が出された。たぶん日本人に合う中華料理一式で、10人ほどと一緒にテーブルで食べた。スープ、茄子の味噌炒め、ゆでキャベツ、ご飯、鶏肉、マーボドーフであって、まずくない。

中段の階段の途中にも有名な茶店があり、宮崎駿のアニメの舞台になったとか言われている。例の民家のあたりもそうらしい。こうしてどうやら宮崎駿のお陰で沢山日本人が来ているのかもしれない。ただし本によると、それは間違いらしい。この町では赤提灯が沢山、店の前にぶら下がっている。全体としては薄汚れた町であった。

帰りにバスから夜の町を眺めると、なかなかよい光景であった。観光会社もそれを知っていて、ここぞという時、5分ほど車内の電気を消して走った。九份へ来る途中は田舎なので、台湾の田舎が見られてよかった。途中にところどころ小さな町があり、そこでもアパートやマンションが多かった。最近は十分という観光地もできた。

16 台北101ショッピングモール。 三日目、「101」へ行ってみた。最近できた、大変有名な、台湾で一番高い建物である。台湾は竹の国なので、デザインを竹に模してある。その建物の地下一階から入ったら、すぐ例の小籠包で有名な鼎泰豊があって、やはり待ち時間30分という混みようであった。我々は本店を体験しているので、入らなかった。

初めの四階くらいまで、世界で有名なブランド店ばかりであった。そこへは客はあまり入っていない。値段が高いのではないか。経営的には失敗するはずである。四階から七階までエレベーターで登れるが、一人500元なので、取りやめた。四階に磁器の展示があったので、楽しく鑑賞した。台湾には良さそうな磁器がある。色採りもよい。ただし高いから買えない。この建物自体には観光客が多ぜい来ている。台湾の田舎から来ているように思えた。喫茶店で軽いランチをとって過ごした。アメリカの初老婦人が大盛りのケーキ皿を取って食べていたのには、驚いた。日本人だったら3～4人で食べるようなものである。

17 国立歴史博物館と本屋。 四日目。国立歴史博物館へ行ってみた。途中で、植物園を通ったので、のんびりした気分になった。マンションの宣伝マンがいたので、話し掛けてみたら、マンションの値段はかなり高かった。都心のど真ん中だから仕方がないだろう。中古マンションだったが、値段は日本並みである。

ところで国立歴史博物館という名を見れば、誰でも普通は行ってみようと思うだろうが、台湾は違っていた。歴史がないのである。だから、中世期の少しの器と、多分有名な現代の台湾の書家と画家の作品が並んでいるだけだった。一種の悲劇である。表面的に言えば、19世紀末から、あるいは蒋介石の時代から歴史があるわけである。というか、あるだけである。世界には歴史ある民族と歴史なき民族がある。これを考えに入れておけばよかった。だからここはほとんど見る価値はない。ただし、建物の隣半分のセクションで、道教千年展の特別展があって面白かった。だが道教も台湾だけの歴史ではない。

ここにコーヒー軽食ショップと紅茶店があり、前者に入った。両方とも前の植物園が上から眺められて、落ち着く。

ホテルで、一番大きい本屋はどこかと聞いていたので、そこへ向かった。市政府（市役所のこと）の隣で、阪急百貨店（日台合弁らしい）のうしろだという。誠品信義店という綺麗なデパートの三階で、その書店は、大きく、15室くらいに分かれていた。店員に、「台湾の歴史という本があるか、日本語か英語で書かれたものがあるか」と聞くと、コンピューターで調べてくれて、「ない」とのことであった。店頭にはないと言う意味だろう。あるいは本当にないのだろうか。そこを出て、スターバックスで軽食をとったら、近くに「101」の建物が立っていた。前日来たところである。

18 その他。 台湾では、今、葬式は派手で、放課後のスポーツが盛んである。道教が信じられ、亡くなった子のために赤い封筒をお金と共に道に置いておく、これを捨った人が亡くなった子と結婚することになるそうである。そのため赤い封筒は捨合わない。また、自分の名前をよく変えるそう。運勢のためだ。

お寺の前で、面白い事やっていた。お札に追い払いたい人、物、を書いて、スリッパでクタクタになるまで叩いて、そして燃やすのであった。町ではポイ捨てが多い。

台北（台湾）には、札幌の空港から正味5時間で着き、帰りはなぜか3時間だった。風のせいかもしれない。近くに石垣島があり、その近くに沖縄がある。熊本から来た人は2時間でやってきたという。台北だけでは、京劇でも見ないと観光旅行としてはつまらない、というのがワイフの意見であった。台湾人の海外旅行先は、2017年で多い順で、中国（香港除く）、日本（456万人）、韓国、香港、ベトナムである。香港、マカオ、上海、沖縄は、とても近い。だから簡単に行ける。ガイドのトさんはしょっちゅう日本に行っている。ちなみに台湾へ来た2019年旅客数は、6000万人で、中国35%（うち香港・マカオ17%）、日本24%、東アジア22%、である。

1991年にウィーンに留学した際、半年ドイツ語のクラスメートだった、私より20数才若い人と一度年賀状を交換した。彼女が住んでいた台中市の住所に、今度台湾に行きます、と葉書を書いたら、返事が来なかった。恐らく転居しているか、結婚しているか、無視されたかである。しかし国によっては、宛先に届かなかったと連絡が来るが、来なかった。

旅の本としては、「るるぶ 台湾」で探索した。参考として、伊藤潔『台湾』中公新書、がある。